夢描く場所

千葉市立高等特別支援学校
学校だより 第1号
令和5年5月25日

＊ まず初めに、学校だよりを出しそびれておりましたことをお詫び申し上げます。

次の10年に向けて、始まりの年です！

今年度、新たに13名の教職員、そして32名の新入生を迎え、高等特支の11年目がスタートしました。あらためまして、在校生の皆さん、進級おめでとうございます。そして、新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

平成25年に開校した頃は、校舎内はあちらこちらが工事中、グラウンドは雨が降れば田んぼのようになり、体育の学習では水泳指導もあったと聞いています。この10年間で環境も学習内容も大きく変わってきております。ましてやここ数年はコロナ禍で、変わらずを得ない、我慢せざるを得ないことが多くあったかと思います。それらを踏まえての入学式式辞を抜粋して載せさせていただきます。

皆さんは、新型コロナウィルス感染症の影響を大きく受け、中学校入学時は一斉休校からのスタートでした。その後の3年間は学習方法も変わり、様々な行事等も中止や延期、縮小を余儀なくされ、周囲からは「残念だけど」や「我慢して」等の言葉、そして「かわいそうな学年」と多く言われてきたかと思います。でも本当に「かわいそうな学年」だったでしょうか？その時におかれた立場や状況で、創意工夫を凝らして考え、時間や回数は少なくとも、精いっぱい楽しもうと努力してきたのではないでしょうか。勿論、自分たちだけでは難しかったと思います。先生方や保護者の方々と相談しながら、「考えて、決めて、やってみる」ということを繰り返してきたはずです。コロナ禍真っ只中の学年だったからこそ、身につけられた力だと思います。これこそが、本校が目指す社会自立、職業自立に必要な根本だと思います。

今年度の新入生は行事等のタイミングから特にこのように言われてきたかと思いますが、同じようにコロナ禍を過ごしてきた、2年生3年生にも同じことが言えると思います。「考えて、決めて、やってみる」そしてそれを更に良くしようと「考えて、決めて…」という力が着実に身に付いてきていると感じています。

開校から10年かけて変わってきたこと、変えてきたことをしっかりと見直し、10年後の学校や自分自身がどうなっているか、どうなっていたいかをイメージして、今できることやできそうなことを「考えて、決めて、やってみる」ようにしていきましょう。

終わりに、好きなCMのフレーズを2つ紹介します。

旭化成ヘーベルハウス：「考えよう。答えはある。」

日本経済新聞：「正解は、まだない。日経は考える。」

相反するように感じますが、どちらも同じことを伝えています。これからの学校生活でも社会に出てからも、答えのない答えの出ない問題にたくさん出会うと思います。諦めることなく、最善策を探していきましょう！

校長　三宅 健二朗